徒然抄

特別
イ4
1919
715

44
1919
103
715

徒然抄

雲ふかき撞くかねの人の寒さかな

思いやるかな鐘の音こそ

雲ふかきさもあり朝の風もなど

昇とる手もさぞこごえぬらん

朝霧のふかさ一しるし山かげの

庭のくま毎朝きき見て

永鶏叩き鼠庭くて夜いねけぬる秋

古杉や三百年の風薫る　〃

三尺の庭に千年の若葉　〃

天つ神定めたまいし国なれは

わが国なるとかりけり

ひと筋をふみて思へは千早振る

神代の昔とはかりなりける

おのつから仇のこころも鹿くまで

誠の道を求めやくれなる

ありとみる世に風もつ苔の奥　曙覧

我の御言をそなうくる

河瀬の音に根ばふ岩と岩　口上

うづきを回る水を狭めて

淵めぐり流るる水をほとばしる　口

廻きおろすつく岩ぶ

滑らかに露もつ苔路風吹きて　口

下陰くらき岩の奥の谷

吾が郭をよろこび涙こぼすらむ　口

鬼の居る寂寞の夜の宮

人真き人は守かる郭ちる　口

鬼の魂要はけと来ば告げもせむ

凡人の耳はいくらか天地の心を　口

めに滅るるわがうれ

酸っぱ味あるを辛くもあるの味ひを　四上

一かたもてる匠の仕事

風の病科を飲きて最りぞ入る　四上

菓子の口味有る宮

勝入るとはあるもあるの美の屋を　四上

水にとられて身をすくめおり

元日や我と日本にはじまれり　水吟

元朝や新たに古りて富士の山

仰向いて咲く花と思ふ春の雪

残る雪支へる垣のあたたかさ

陸ひらく天下の春を目にいまし

白うをやえ〻ゆうべ江戸のあ。

夕立や金鼓山河を動かして。

踏みし心草鞋脱かたや夏の霧。

和踏んて右踏んて草ふんで夏霧哉。

心惜きこの待つ庵ち卯く和歌哉。

つかの間か汀にうごくき蓮の　一茶

深世蓮とそ花のさく哉

むさし野や深とり蓮さへ主かある。

も一度まけうこん〻時ゐ。

蓮の庵の経かくとそ見出たる。

あつ涼しまぶしとつ夕ひとうこ。

小うさぎ山もさうさう花の何のと〃

人の道ゑらさる山に誓の法ほけ経の

誓をかとらして〃

つりかねの中から霧の出なりけり〃

四ぢ〳〵ちや撥の中るきり〳〵に〃

辻堂を番紋に借て寝なりけり〃

初もの〻雪も佛につくゝゝ〃

門の雪ふうどもすれにさんけり〃

幾の出ぬ中くさくゝ式〃

苔清水愛にあるゝを逗連を〃

松にさけるゝ笠の涼しき

今の代やり屋に茶山さくゝ〃

大藪の湯の小すゝに笋の　〃
逃て隠れて身をかばふ哉

露とこゝろあさつゆ哉ありと露の世の〃
露と露を思ひさりけり

にくまれ蹄慢く笋の　〃
ちんちんとぞ生出る哉

梓湖を山と見なして秋の月　〃
ふしきなる生れ家でそなの月　〃
ちゝなる戸ゆかゝる我も旅人ぞ　〃
月出て淋さかゝの通りと夕雲の〃
栗の志らゝ露稗の村雨　〃
くやしゝも熟柿仲間の産うきぬ〃

我家は媒井色の氷柱かな。

稲妻や二尺八寸そりやこそ抜いたる業

岸辺の底見えくも紅葉かな。

風の夜業　夜業の風と亂れおつ。

初めや髭剃りたての男ぶり。

質屋も枯れしかな霜夜かな。

解近しあの秋の夜もきのふかな。

蜘蛛おや掾沢の織柱計未成なり。

丸ま秋　霧のいぬ間を面白き。

深山木や八合に残る秋の雪。

松は枯れて御影しさの遺りけり　一休

いざ風の鑓きらこめて雪の峰

酒十駄石合持つて行くや夏木立　芭蕉

ほろ〳〵きれ大井川を渡る月夜

唐國の虎狩す空を入るよう　同村

或る志賀の赤ぞ花ふき

庫のまをとり怪るん入るとも

思ひかけじといひし人あり

雪くる夜や炭もて炭を砕くこゑ　蕉太

ちつとも戻れば庭に柳かな

昔くゝる縄きれもすて年の暮　芭蕉

年暮れぬ笠着てわらぢはきながら　芭蕉

元道や行人くるん秋の暮

我庵の大つゝを切んつ岩こゝ　一茶

袖こゝも露立のゐる山路かな　〃

梟の二人きけんや秋の暮　〃

汚れん雪世間並さへ解けぬるゝ　〃

鶯や田舎通りのくたんべい　〃

露の世は露の世ながらさりながら　〃

今のあるまで花さく木かな　〃

古里やよろこばせとて蕨の子　〃

顔見せに撫ぜつけ雪の落世かな　〃

世の中よりびかい露かくれなつる　〃

雛ゆるゝや関八州を一番乗　〃

蛍の吹けば家とゝまる木槿哉　〃

一斗でいくらか稲を売る　〃

稲妻の光りうき世家ふ　〃

さあ来いと大口明けしざくろ哉　〃

日本はばくちの銭もさくら哉　〃

かしまや江戸見えの物さま　〃

蔵村や馬盥かくも時の立　〃

春立や苔しかふらす五十年　〃

庵の懸巣か掃てくれけり　〃

渡り鳥日本の我を見しるかな　〃

二月村二兵衛新田梅の花　〃

洪しさや苔の下の先祖達　〃

秋の蝶東山子の袖さまりけり　〃

晩捨てゝ小老足むつかしく「有合の山ですま

すやすの月」　〃

名月やとたかく立ちあがるこゝ

開けさや岩にしみつく蝉の声　芭蕉

鐘消えて花の香は撞くほうかな

木のもとに汁も飯も櫻かな

五月雨をあつめて早し最上川

狐火や髑髏に雨のたまる夜　芭蕉

釣り上げし鯉の口より公孫や吐く

不思議一つ埋め残して若葉かな

閻王の口や牡丹を吐のんとす

むかしむかしあるところに牡丹の恩義

の情把別と春ぞ

だんぶく花咲り三と五と五月は花に三月は

白し記得す去年此路にて

ながくとおつる岩間の清みづ清みづ

わびしさの一雫

楽の庵ときくに賤しき名なれども 〃

世をこのもしき住ひなりけり

ものさびの軒の板間に苔ちて 〃

思ひ入るとの海の月かな

大海の磯もとどろに寄る波 宗祇

割れて砕けて散るかな

朝京はたゞ手にかくさへ哀れなり 芭蕉

古の七のさかしき人なれども 酒にしあらし 大伴旅人

言はもよし為むすべ知らに極りて

光きこのハ酒にしあらじ

あるみたらく賢しらをすと酒のまぬ人を

ふるえば猿にかも似む〃

をしろよと夜あれて恋をしれ大江丸

夜の方をさらさらと似る秋の風岩雪

あけがたく行燈に残るともしび夜ぶ

ちきく夜をさまく思ひあかしけり

柯の木やてきはすき散つてツントエ　一茶

山の菊曲るもそれぞれあるべし

田の人の見も恥かしく夏姿〃

田の人をこて形出畫家〃

雲ふかり博い蔵も迹の村〃

大名を眺めるうちに炬燵こる〃

門の雪汚なゐ先にとくきへよ 〃
寝酒いざ年が行かうと行まいと 〃
恋ゞ紫のうの向新のあんか家 〃 〃
我菊やちきれい方へうんむいて 〃 〃
大菊よ滝目の序を思いだや 〃 〃
寝ゝと寝て呼たけり若うの菊 〃 〃
人の人我ハ我う家の涼しさよ 〃 〃

峯をうつす剣刀もうつ走りの雲 〃
野仏の御鼻の先の水桂哉 〃 〃
岩ま切る鋸引や京住居 〃 〃
庇持をついて手びとる草刈 〃 〃
年玉であらうもむかう家貴刈 〃 〃
うんとうくさあるく犬も年忘 〃 〃

我拳志ゝ義はなるけり 〃

指さゝのうゝの葵の咲ひけり 〃

我も似て結ひし山もかすみゝる 〃

恥しや糸瓜ハ糸瓜の役に立つ 〃

かしまやゝ将軍拳の一ひやとそ 〃

出吟やてしゝも口を持つたそ 〃

花見人と成てばたれく哉 〃

大方の禄盗人や冬籠り 〃

起番よ寒番よ丁のあつまりき 〃

膝の上に子うゝゝる鹿子哉 〃

悲面の朝鳥哉と咲いけり 〃

今の世や花見かてらの小盗人 〃

百年の誓もやれ老を嘆く　一茶

世に生れては無理を解き門を雪　〃

形見や何の苦の美めぐり　〃

露の世の露の中なる喧嘩哉　〃

死にこがれ〳〵つて寒さうな　〃

死に仕舞いたもとさくら哉　〃

人間は清水で無りけり　〃

泥中の蓮と力み合んで咲にけり　〃

作〳〵蘭から出て枯けり　〃

埋火をはね起しけり盗み栗　〃

下〳〵衆は左も陰参る花の蔭　〃

我門や誓もやとす笠もちき　〃

向降るや翌から横の雪てもろき
餅の出る樋かるしさよ年の暮
合點してたてもこの寒つを笑しいぞ
一茶坊に過きぬるや炭一俵
あてつるや貰ふもうつき二ヶ所
我が家の貧乏葛も知の業ふる

拾ひくやあのん今年も貰ひ餅
村雨も霞のにせ玉つくるうり
あらましは汗の玉かよ稲の露
中着の殼水流るゝ夕すゝみ
江戸住や鉄出るあをやぐらうつ
門ゝ打ちも鍬うつ江戸住居

人は武士君は粒とも唐からし
橋演一張京とのもも皆を
土一斗金一斗や門涼み
鳥さしの邪魔ろ花けり松の餘
恵猫や少年立てい子眠る
山霧の通りぬけ行く大雲霧
をかしても降ろやしに松くふ

粉出しそばげ蕎麦今の面
おとろへて花を打ちも口まける
国前の稲ちめも乱の代りふ
世の中や皺顔又花浴蕎麦
万事の松をけちも納豆汁
こちとらは花か咲かしが咲くまへか

乳嚙んで口で南無阿弥陀仏いふ　一茶

昔の海苔やすも鈴ふるはたをおる　〃

蓮の月のとちんぷんかんのうきせいふ　〃

住居でいの月と仏とおらが蕎麦　〃

放れ雲雲一すぢくて眠りけり　〃

やれ打な縄か手をする足をする　〃

神の蔕じつと人なびらうら　〃

門口の銭だけそよ〳〵夕涼　〃

夕立のとんぼ不の野茶屋こふ　〃

武蔵野や蚤の行くも下の海　〃

美人らにあちぼうくく糸瓜こふ　〃

毋馬が番して居ます活ばこふ　〃

柿の木とあのと差くる小便こふ　〃

鎌倉ゆや二軒もやひの夜七畳　〃

面白しするぞ意して越べ庵の除 〃
響かすもや見る傍り屋敷 〃
一の俄のだまつてしくるく式 〃
流いとこ母が合ひけり山の柿 〃
さまくに夫れと咲く菊の色 〃
降る雪も梅の氣もるきかいし式 〃
風の糸引とらまへて寝るふる式 〃

梅おりや盗みまするとと大雪に 〃
梅の木のちる顔もちあ山家に 〃
鳥の音に咲かるもちる藪の梅 〃
行秋を屋花がさらばしくこる 〃
かりくとけかぢりけりきりくに 〃
ちるしやの乱かき破るきりくに 〃
歯ぬけをちるに歯ぬけをあもあ、ア、モアミタ佛く哉

何事も まねき果てる 芭蕉

やすからむ お日ぢはゆくて 冥加なる

さこうき山にまふ世の人 芭蕉

ことの葉は人の心の 形なれば

おもひをのぶる外なりけり

家じとうけひのあのひとまをを

ふけもあへまし冬の山里 竹田寫

朝点や今朝ぞくまれ(雲)咲かゝる 許六

咲ばちり酒は鈍るまぶれの 成章

雲と月とぞ人の世の中

思ひしとおもへとおもふことを 子羅

心のもののこころなりけん

面の皮ぞ極楽山の手味こう家 松一

世の中のをめうきことをなうるる　有切

夏衣きもまさ変りもやせ

和歌の庭なくきけり年の春　苔蓋

いさや寝ん元のハスあすのこと　武角

さく花に遊ぶを見んば鳥なけ　大隈言道

はるこしのみは思はさりけり

舟ゑばなだり川霧の春こる　黒村男塚

我だも独りと思ふ春の庭に

きてばさしいる岩の白雪　夢香岡山

梅の枝にうぐいす雪やとけぬらむ

けさあらぬ霞の花にこがれる　金槐集

わ神に春をだに残せ桜の花　〃

あかで散るなぬしをうめさんかなる　〃

誓はいたくなわびそ桜の花　〃

ことしはの見る散るはのうらはば

梅ゝ者や元合の家もものどかなる　其角

いとゝ咲く草の花のうつり香は　岩集

かき根の梅のにほひうつりけり

人ら梅もあるて梅ゝうゝ月えうふ　一茶

浮世の月えうしにけり　未二集　〃

更科の月も四角でハるゝうゝけり　〃

あだ人と梅を植に飲乾さん　重五

日の本のたかゝ原ハ天かゞ

こと國のけて不二の大山　蕪国傳正

天つ日の照ゝ四方の國中に

たぐひなくて富士山　仙蕉渓

今の世の人のつゝに柏ゝて

ふきハ一きかゝる琴の音

梅ゝ人ゝ詠ん世人か

法うるもとゝかなる世の中

大かなの世すて人ゑ心せよ　大淀

衣はきても孤ゝるけり

はつしぐれ様も小蓑をねがはうる　岩意

しくゝゝや黒木つむ家の雪かな　几帳

代さゝる今貸す寺のしぐれ哉　芝莉

誉のしるべ有るべ夕しぐれ　太祇

ひとつゝゝ漁火消てしぐれ哉　鳴雪

秣焚く家に有るしぐれ哉　柳石

松う枝に蔦の紅葉深しぐれ哉　村山

ゆる池やしぐゝ音のよるまぶら　子規

大仏を拝分ぬらすしぐれ哉　仙字

夏研や暁ごとの柳拘ふ　艾角

忍を焼いて夫鶏を煮る夜酒淋し

今や角田川を橋とのみ渡る　丈角

十五から酒を飲み出と今の月　〃

女の角の折れてあり麻の咲きこぶ　〃

犬わらびかくるは淫の分うて　〃

酒を毒毒を妻の花ひろふ　〃

名月や岳酒飲まんと頬冠り　〃

もとかしや雛を動しそいさうきき　〃

寒燈に柱も細る思いこる　〃

町と共に裏〻寺や陰忌の鐘　〃

菜を入れ筑波ふきあるまのみ　〃

初濱に住ば泥志春の雨　〃

夕霧の影かんむ稲の村　〃

なぐ一人いつも稲を刈る人ぞ　〃

ゆ埋めの薬むくふ花ひけり　〃

我庵とゆるみし巻ち奴猫の恵　〃

蒲萄の棚梨子の花ちりけり　〃

くろかねの膚の汗の光ふ　〃

池の芽に遊び交りて深ふ　〃

荒波や島もとゝにて高し　〃

殿作りまゝや紅葉の山嵐風　〃

黄菊や紅葉や村に這入りけり　〃

無用の白紙恩合ひあきて死ぬらむ　〃

放屁論俗論豆をにくみけり　〃

田の人の春の御言きのふよりきの日和　〃

汗をぬぐふ新の殿の深きふ　〃

栗を拾ふ小庵と云ふ山路ふ　〃

桑の花や黄葉の僧今の世　〃

遠ければ柳ばかりの小村ふ　〃

柳柳村の縄樹人の生活ふ　〃

萩桜の山の寺南禅寺　〃

稲かりて栗の茶屋のあらはふ　〃

俗のきえ風鈴ふるや僧の長閑　〃

栗山子さく郡山くの海くるる　〃

豊後の田の面の栗山子沈みたる　〃

山田寺る栗寺ふる兵四の尊人る　〃

御堂田に法師姿のかしこる　〃

高き宮に英蓮海の月夜哉

時計鳴るよりと寺うる花の寺　〃　支坡寺

はきだめの蓮のたるる芋まる

子い親にこと つきて あるけれ　言道

山松のもとくかるる月もる　〃

うらやまげるるかばの冬芋

陽炎の動かす石の芽表るる　井月

逆影のたまくたをる温石　〃

詩人の面心を頼む掘未の邪　〃

降るとまひ人は見ぬ花墨　〃

夢面や心のまくのいり牧　〃

黒みけり沖の暗雨の行ところ　丈芳

舟屋を見て美に顔の小時うぶ　〃

寝ぶくりの方になりちやきりしれ　〃

ふるさのしや蚕子の身の修り　〃

我が事と泥鰌の逃げし根芹乱　〃

ゆりくる恩のまみかや崩れ築　〃

星のあとさとる人や門涼　子規

夕涼よりそ男に生んだる　其角

戸を明けて飯恨に甚の主人うぶ　蕪村

水江の斜の片雨の時雨うぶ　〃

瓜の音に狐遠る月夜うぶ　白雄

やは肌のあつき血汐に触れもせじ　召子

淋しからずや道を行く人

山門を出でば日本を蔦摘歌　菊舎尼

蟲ちろ〳〵鉢にこぼるゝ音色うぶ　程良

わう氣の空にしぶ庭やきりぎす　蕪村

掛かけて寝ようとや秋のきりぎす　文叶

つんのあり所く掃ぎきりぎす　〃

白髪ぬく枕の下のきりぎす　芭蕉

墨付けし行燈を注くきりぎす　桃人

十はかり耳あり夜や霧のこゑ　蕉太

いづこにか身をばすてしや世の中に

老をいとはぬ人しるけれは　為頼

花咲かぬ身は狂ひなき物こそ　〃

根の切れて極楽あり桔梗尾花　〃

うぐひすの起せど眠る柳かな　〃

枝ばかりと成りて風の柳うら　〃

木からし柳のこはらし音や秋の風　〃

さびしさのうめくもあり秋の蟬　甘そ村

日ハ暮れて夜の夜ぬけを鳴蛙　〃

柳散る清水流れて石ところ　〃

起きて寝てもう寝ようとや夜寒哉　〃

やみの夜一針ぬきの芋うゑ　拙一

鳴かぬ田もうゑ田も動く蛙哉　〃

刈のけて一ノ侍つ小田の畦もかな　〃

最の枝美人の膚のしろくうゑ　〃

鳥追の足袋の白さよ川向ひ　〃

桂や命をかけしつれかつら　芭蕉

わびぬれば わび庵ゑ帰るうゑ　雲

心やすきを思ひ切んして

うぐいすの巣わがまゝき初音哉　蕪村

草家みあまうゑうき日暮ゑ　〃

いかだしの芋やあくしの花ゑ　〃

あ蕨を細腰高き桑ゑ　〃

蓮の芋や あを那ゑ茎二寸　〃

たんぽゝうゑまん花ゑ路の雲　〃

子を亡くす哀さく無て枯野哉　〃

狐火の燃つゝはかなし枯尾花　〃

しがらみや何に世流る家五軒　〃

麦まきやあらし生らう顔はあり　〃

古寺の蕎麦あさましき花盛哉　〃

二村に貧屋一軒冬木立　〃

蘭あらいに茅の氷と嘆枯乱　〃

御經に似て苔さらす古暦　〃

四ツあり古鼠の音の冬さうな　〃

馬の尾にいばらのかゝる枯野哉　〃

蕎麦ゝて石に日の入る枯野哉　〃

積ゝても我が拂はぬ庵の雨の

大伝

もみちは秋のかなしみなりけり

引ひきもひかぬ人もなかりの泡の　〃

海世なりけりよとの川なみ

消の宮を竜とやいはむ　〃

誰も皆赤の松宮の巻の朝霧

人の名さく俗をなりつる

雪ふる深き隠れかはなり　〃

この俗に冬こもりして春待む　〃

春来れば埋む山蔭なれ

心も解れさをはぬあらしかな　〃

積るかぶりつもるみなは

松ふるさと芦は白きく俗ふる　井冷

尾花拾ひて野川二筋三筋こす　竹冷

むらむらともものいふさまの清水かな　〃

石踏んで石踏んで芋踏んで夏空哉　〃

雲の空や重なり合うて山成る　〃

山雨来るへくく軒に桐の響哉　〃

出合ひ人合ひ夜半の秋　〃

侍るなり厂史この水と秋の彩　海大乗

〃

振鼓の敗荷を踏み多日哉　〃

〃

解けそめしよりの雪　菊食(白)

あと先のあるは橋のまぶしさ　〃

来て見れば素うの森の暮さこそ　〃

人の為す罪なく低し雲の峰　一茶

杜鵑の聲さまかたに月傾きて　宋屋

いとゞ尾花の露まばらなり

人とはぬ苔の庵の夜ゝ　〃

とはすがらの霜の音ぞする

さすが梅の枝も最の えんとや　〃

無のあとゝ月の白波

あまゝく遠山 星きゝ夕くれに

入江の松の色ぞまさりける

山ゝ心の住家かはら葺　芝屋

世を捨んこしかひなきこゝろ

けがれなきあくがれにあはけこ霜をも　〃

玉にてもぞ月のすみけり

糸のかゝるこゝろにまとわれて　〃

思ひとかなあ世の中のうさ

春毎に武世の人かなあこ〜　六条右大臣

梅よ誰を思ひ出つらむ

山里は杉の梢ゝきこゆれて　基月

風吹の音はさみしかりけり

うらやましく心のまゝに咲きてゝ　〃

すぶ〜しくも散る梅ゝかな

うゝ鶯の煙も心のちりいかも　〃

拂ひて清きくもの〜ふ

誉の都に出でん中宵に　〃

偽さばやと思ふ梅咲にけり

遠山に若き宮ゝ冬木立　松一

あゝ〜なるもきく〜て世の中の　冥府道慶

月と花とにまゝと向ひけり

かくばかり恋しきうめの花おもふ 〃

中の雁なくなるべからけり

袖の花人の涙のこぼるるは 〃

我泣くよりも悲しかりけり

笑みて涙こぼるる世の中に 〃

泣きて笑める人もありけり

捨つとなくは憂世をいとふ心あるも 同

わんぱは黒雲秋の夜の月

いつこにも住まんまど広ば住まであるも 〃

笑ひ屋のしばしばしるる世に

大波引かん出でて心地して 〃

助け船うるき沖にわるる

遂かるる黒のはざまん物うみて 〃

人目おもはぬ物おもはばや

惜しむ鐘の音さへかはるなり 〃

霞やあらぬ霞のむすびかふらむ

昔見し梅の小枝に春来て 〃

あらしの音を梢にそなく

今朝見れば霞のまがふ梅の花しぼめて

起きもあがらぬ女郎花かな 〃

月のなごり畫を惜しむかひなきに 〃

しばし留まれ夜をしら雪上

数ふれば身にさく年のつもるかな 成尋法師

老の人をもきらはさりけり

眺むるにそなる星もなべて春の夜の 大江千里

朧月夜ぞめでたかりける

花ぞきにたちき清の水茎は　　佐基

かき流せるしどろもどろに

名にめでて折るばかりを如月花　　通恵

わん漬ちにきと人に語るふ

色の色は雪とこめて見えすとも　　〃

香をかたにぬすむ春の心風

夜もすがらいくきぬ竹をそう夢の　　正風

如えもんうを思ひけるふ

叩かんて童の敲を吐く木魚ふ　　譜

立つ程の大鐘つくや度法の　　〃

山門の仁王に迫る蓑虫ふ　　醒雪

行く人も拝俗の色にうるはけり　　碧梧桐

大徒高に出るる高ちるるけり　　子規

あるくに人里遠くうるにけり　柳生十六衛

あまたに山の奥をたづねて

時鳥きき鳴く人もうきこ山うも　赤梨

かへりて春を惜まさるけり

窓のしをあけくれどあかぬぬち　〃

うるはる世の塵うるけり

吳竹のおきふしこゝにあるものかな　〃

人の心のなほからぬ世を

ますらをの心に似たるいさこうるまるあるき　〃

窓のくれの竹

久方の空はへだてもうるけり　〃

玉うる国はさかひあれども

大空に猛くて見やる高岳は　〃

登れば道のぼる道にあるけり

雪しあらばいかでか入りなむと　〃

思ふがやかてやまとなまいい

岡を思ふ方に二つなかりけり　〃

いくさの場に立つもかいなし

すしさや裏ハ鉦うつ光林寺　漱石

庭見ゆる一枚岩や秋の雨　〃

葉ハ茶山ふるて侵蓋どめ　〃

風ふ乗つて軽くのしかり蕊うるま　〃

作ら花ど菊咲にけり新ふにけり　〃

弦音にぱらと落る椿うる　〃　〃　〃

莖ふどふふさき人に生れたり　〃

月ふり散石蕊を忘れたり　〃

身を捨て世を救ふ人もますまるを

芋の尾にいまもむとむ人　良寛

御製

起出て思ふ事ともあしたことを
おさらふ心にひとしからけん

事しけき世にたゝぬまん人は皆
まなびの庭に勵めとを思ふ

目に見えぬ神に向ひてはちさるハ
人の心のまことなりけり

かさらむと思ふはさりもはらぬくに
うるはしからむ人の心は

吹上の瀬にてる日のかゝやきを
あさくあつくえぬるなるふ

たちつゝく市の家居の暑からむ
風の吹入る窓せばくして

重荷ひく車のおとぞ身にしみる
てる日の暑さたへかねきぬ

むかしいま思ひあつめて
つくづくとあけがたの月をながめつるに
ふりわけよ信にはあらぬ鹿毛の駒と　春甫
みるのみ人の道かは
八文か雲にせけりの色鏡　一茶
月さして一文銭の光をぶ
晴しやまの話らはの鶴

春うれや谷のうぐひす山の朝霞　蕉
寝心やいつとなくなく春の素波　蕉村
菜の花にのとけき大和河内哉　蕉太
ぬばたまの妹か黒髪今宵かな　春甫
百毎き元服にも寝くたれ
ぬばたまの黒髪乱れ出でぬ　田

手枕の上に妹待つらむか

初寝髪　われは抜くらん　愛しき　〃

君か手枕　解くてしあを

黒髪の　乱れを　知らず　打ち伏せば　和多武か

まづ掻きやりし　人を思ふ

ことなくと　やすぶ心は　なかりけり　弾正

伝　あらくもあやふかりけり

とまれば　思はぬ方に　うつるかな　〃

こころすべきは　心なりけり

一方に　ゆきもとめて　さよ千鳥　朱雀

いづこの浦か　須磨はなるき

かきくらす　あめりか人て　左衛

天竜の舟〜くゐのとりつえとぞ

駿河路や花たちばなも茶のにほひ　芭蕉

五月雨に濁らぬものや蓮の葉　〃

花の奥心に角はなかりけり　麦水

思ふまゝ終に香り深し牡丹哉　蹴月

入れの錦とばかりゝん竹きすて〜　かゑ之丞

身の夕暮と知る人もなし

何事も心にしめて思ふこと　士朗

いかひ流のまぐちなりけり

胸はもえ神は流いしをまて　〃

なくなく入るこひもするかな

朝おきて口ずさむと唱ふれば　〃

心ハ君を恋ひつゝ居る

海行者美都久屍山行者草
年須屍夫皇乃敬爾許曾死
米可奚里見波勢自

病十無聊を慰る（花筆とのいとも）
をかし三日を費して成る無聊の
慰しを老の手すさび

昭和十五年二月

柳春堂

以下全て

白　紙